

エジプト先王朝時代ナカダ文化期の 上エジプトにおける合葬墓

黒沼 太一

Predynastic Graves with Multiple Interments and the Mortuary Practices of the Upper Egyptian Naqada Culture
Taichi KURONUMA

先王朝時代上エジプトのナカダ文化における合葬墓に関わる墓制の基本的な性格を明らかにするため、墓地遺跡計 19 地点を対象に、比較分析を行った。その結果、同時埋葬墓はナカダ I 期から II 期前半に最も高頻度で造営されるが、ナカダ II 期半ば以降は散発的な造営に留まることが確認された。この傾向は、基本的に対象とした墓地遺跡に広汎に当てはまる。一方でナカダ II 期には、墓坑を多数擁する一部の墓域において、改葬行為や追加埋葬を伴う墓が少数確認された。これらはナカダ III 期には見られなくなるが、一時的な墓制の多様化を示していると考えられる。

キーワード：合葬墓、ナカダ文化、墓制、上エジプト

The purpose of this paper is to comprehend the basic nature of Predynastic Egyptian graves with multiple interments from the Upper Egyptian Naqada Culture. For this purpose, nineteen Predynastic cemeteries were compared. Comparative analyses indicated the relatively high frequency of burials with multiple interments in the analysed cemeteries from the Naqada I and Early Naqada II periods. Sporadic burials with multiple interments continued until the mid Naqada III period. Furthermore, multiple interments in collective burials were also observed in the Naqada II period. This type of burial can only be seen in cemeteries with high tomb numbers and long usage. The emergence and disappearance of collective burials may indicate the divergence of burial customs in the mid Naqada period.

Key-words: burial with multiple interment, Naqada Culture, mortuary practices, Upper Egypt.

はじめに

1894-95 年に行われたナカダ (Naqada) 遺跡の発掘調査以降、アビュドス (Abydos) 遺跡やヒエラコンポリス (Hierakonpolis) 遺跡など、上エジプトにおけるナカダ文化 (Naqada Culture) (紀元前 4000~2920 年) の墓地遺跡は、大半が 20 世紀前半までに発掘調査された。しかし初期の調査であったこともあり、調査成果の多くは断片的であり、墓制の分析と検討が可能な状況にはなかった。そのため、アルマント (Armant) 遺跡 1400-1500 墓地など、墓 1 基単位での情報に比較的恵まれた少数の遺跡の分析を通じて、王を頂点とする第 1 王朝の形成に至る社会の複雑化、ことに階層化 (social stratification) の過程を明らかにする研究が、ナカダ文化の墓制研究において最も多く行われてきた (cf. Bard 1994)。しかし、今日では、アビュドス遺跡やヒエラコンポリス遺跡などでの発掘調査に

よる新知見、並びに博物館に収蔵された学史初期の発掘調査記録の再分析 (Stevenson 2009a) などにより、墓制をめぐる様々な論点が提示されている。従って現在では、墓地は単なる階層化の証拠を提供するためだけの研究対象に留まらなくなっていると言える。現行の発掘調査が担う重要性は論を俟たないが、初期の発掘調査に関しても、近年の発掘調査成果と紐付けて再度評価することが、今後の墓制研究の中で求められる点と考えられる。そのためには、墓地から抽出できる様々な属性の分析を試み、ナカダ文化の社会像の一端を再構築することが求められる。

こうした検討を加えるべき対象の一つとして、合葬墓がある。ナカダ文化の墓制は単葬墓を主体とするが、少ない割合ながら合葬墓も検出されている。従って、合葬墓はナカダ文化の一般的な墓制から外れた一種の特殊な埋葬となるが、その成因や背後にある社会構造などについては不明

な点が多い。しかし考古学一般では、合葬墓は、階層や階級などいわば縦の社会構造 (Tainter 1978) ではなく、親族組織など当時の人びとが持っていた横の社会的な関係性を示す場合があるとされる (Parker Pearson 1999)。従って、合葬墓の検討により、ナカダ文化期に存在した社会構造の一端に接近することが可能になると見込まれる。

本稿では、各墓域における合葬墓の様相を明らかにしつつ、それらを複数の遺跡で横断的に比較し、そこに一定の時期的な傾向が見出せるか否かを探ることを目的とする。そして上エジプトのナカダ文化圏の中で地域的な差異があるか否か、それが国家形成へと至る大きな流れの中でどのように位置付けられるかを明らかにしたい。そのために、本稿では上エジプトにおける墓地遺跡を主要な研究対象とする (図1)¹⁾。なお本来、合葬墓は複数の同時埋葬遺体

が検出された墓を指すが、本稿では複数の遺体が検出された墓に拡大して定義する。

1. 研究史

1-1. ナカダ文化の合葬墓に関わる先行研究

ナカダ文化の墓は、楕円形や長方形の平面形態を呈する素掘りの土坑墓に、左半身を下にした屈葬体勢の被葬者1体を、頭位を南に、顔を西に向けて納める埋葬様式を基本とする (Midant-Reynes 2000)。この中で、合葬墓は例外的であり、墓地内のすべての墓に対して占める割合は少数である。合葬墓は、1894-95年に発掘が行われたナカダ遺跡の発掘調査報告書内ですでに示されており (Petrie and Quibell 1896)、屈葬形態の遺体が一つの墓坑から複数検出された同時埋葬墓に加えて、特殊な事例として少なくとも6人分の遺体が改葬されていた著名な T5 号墓など、特徴的または典型的な幾つかの事例が図版とともに示された (Petrie and Quibell 1896: Pl. LXXXII, LXXXIII)。

ナカダ遺跡の調査後も合葬墓は他の遺跡で検出されたが、報告書内での記載は僅かであり、合葬墓を主体的に議論した先行研究は乏しい。報告書内で触れられた事例では、例えばアバディーヤ (Abadiya) 遺跡ではナカダ I 期の合葬墓が多く検出されたとされる (Petrie and Mace 1901: 32-36)。

B. ミダン＝レーヌ (Midant-Reynes) はナカダ文化期に関する概論の中で、彼女が調査を行ったアダイマ (Adaima) 遺跡の事例にも触れながら合葬墓の概要を述べており、ナカダ I 期に合葬墓が頻繁に見られ、被葬者の組み合わせは多くの場合恐らく母親と推定される女性と新生児であるとしている (Midant-Reynes 2000: 47)。被葬者の組み合わせに関連して、A. P. トーマス (Thomas) は合葬墓が造営される理由には産褥死や、乳幼児期の子どもの死亡率が高かった可能性を述べ、疾病による影響や埋葬慣習など様々な背景が存在することを推定した (Thomas 2004: 1045-1047)。トーマスの見解は、マハスナ (Mahasna) 遺跡などの個別的な埋葬事例を念頭に述べられたものだが、ナカダ文化社会で合葬墓が造営される要因に言及した事例として重要である。

このように、これまで合葬墓の一般的な特徴は言及されたものの、多くの墓地は20世紀前半までに発掘されたため、十分な記録が刊行されておらず、遺跡ごとの様相や、複数の遺跡の横断的な比較分析は難しい状況にあった²⁾。近年では、欧米各所の博物館、あるいはアーカイヴにおける所蔵資料の目録化が進み、アーカイヴ内に保存されている調査の記録を分析・再評価をすることで、これまで明らかにされてこなかった墓制の諸側面を解明しようとする試みが徐々に増えつつある (Adams 1987; Stevenson 2009a,



図1 本稿で言及する遺跡の位置

2009b; 黒沼 2017)。アーカイブ内に保存された記録類を活用したナカダ文化墓地の再検討は、最新の発掘成果と合わせて、墓地を微視的に検討する余地を広げた点で、意義が大きいと言えるだろう。このことにより、親族関係の墓制への反映、集団意識、文化的な地域差³⁾など情報の少なさゆえに立ち入ることが難しかった墓制上の諸問題が徐々に検討されつつある。例えば、M. カンパーニョ (Campagno) は円環状の墓坑分布が確認されたヒエラコンポリス遺跡 HK43 地点などを引用しつつ、ナカダ文化期の親族関係を述べている (Campagno 2003, 2011)。また、A. スティーヴンソン (Stevenson) はゲルゼー (Gerzeh) 遺跡のナカダ文化期墓を合葬墓も含めて分析し、墓から看取される社会的アイデンティティの検討を試みた (Stevenson 2009a)。

筆者は、初期の発掘調査を再考する流れの中で、遺跡ごとに合葬墓の様相を把握する必要性を考え、ナカダ遺跡を対象に、現在入手できうる限りの記録類を用いて、ナカダ遺跡における複数の遺体を含む墓の検討を試みた (黒沼 2017)。その結果として、同時埋葬墓 (タイプ I) に加えて、元ある墓の一部が重なったり、隣接したりするように別の墓を造営した事例 (タイプ II) や、ナカダ II 期半ばに見られる複数人数分の遺体を一つの墓に納める改葬墓 (タイプ III) など、複数の埋葬様式が観察された (図 2)。タイプ II 墓は、本来は合葬墓ではないが、複数の墓が一つのまとまりを形成している点を重視し、準じて扱った。タイプ III 墓に加えて、タイプ II 墓は例外的な事例であり、これらが他の遺跡においても確認し得る墓制であるのか疑問点が残った。

1-2. 問題点

以上から、特に合葬墓をめぐる先行研究については、2つの問題点が指摘できる。

一つ目は、合葬墓に関する一般的な傾向は述べられたものの、各遺跡における合葬墓の集成を行った事例がほとんどない点である。この点は、ナカダ文化期の合葬墓が造営される頻度を遺跡ごとに探る上で重要となってくる。二つ目は、親族組織など合葬墓が造営される背後にある社会的要因が、具体的に検討されていない点だろう。この点は、合葬墓の集成と合わせて同時埋葬や改葬などの埋葬様式の把握が、検討の足がかりとなる。

これらの問題点を解決するためには、多数の遺跡を対象としたナカダ文化の合葬墓の横断的な調査を行うことが必要である。従って本稿では、すでに公刊されている情報や未公刊の情報を可能な限り用いて合葬墓の集成と遺跡間での横断的な比較を行い、各遺跡における合葬墓の様相を把握するとともに、合葬墓の数の時期的な増減や 1 基あたり

の被葬者人数などに一定の傾向が見出せるか否かを探る。その上で、国家形成へと至るナカダ文化期の歴史的なコンテキストの中で、合葬墓がどのように位置付けられるかを考察したい⁴⁾。

2. 資料と方法

2-1. 分析対象期間と分析対象遺跡

本論では、分析対象期間を先王朝時代初期のナカダ I 期から後期の III B 期までの時期を対象とする (Hendrickx 1996, 1999, 2006) (表 1)。初期王朝時代の始まるナカダ III C1 期以降の墓地に関しては、社会構造が先王朝時代から大きく変わるため取り扱わない。

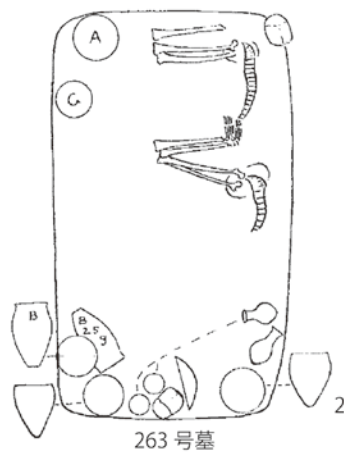
この時間幅の中で、報告書、概報、あるいはアーカイブ内の原記録が存在することを基準に、上エジプトに所在する墓地遺跡の 14 遺跡 19 地点を選定した。これらの遺跡の構成墓数などの基本的な情報に関しては表 2 を、存続期間や併行関係に関しては、図 3 を参照されたい。これらのうち、報告書やそれに準じた刊行物が存在する事例はアダイマ遺跡西墓地 (Crubézy et al. 2002, 2008)、アビュドス遺跡 U 墓地 (Hartmann 2016)、アルマント遺跡 1400-1500 地点 (Mond and Myers 1937)、エルカブ (Elkab) 遺跡 (Hendrickx 1994)、サルマニー (Salmany) 遺跡 (el Sayed 1979)、ナガ・エツ＝デイル (Naga ed-Dêr) 遺跡 7000 地点 (Lythgoe and Dunham 1965; Podzorski 1990)、バダリ (Badari) 遺跡 (Brunton and Caton-Thompson 1928)、バラス北 (Ballâs North) 遺跡 (Podzorski 1994)、ヒエラコンポリス遺跡 HK27 地点 (Adams 1987)、マトマール (Matmar) 遺跡 (Brunton 1948)、マハスナ遺跡 H 墓地 (Ayrton and Loat 1911)、モスタゲッダ (Mostagedda) 遺跡 (Brunton 1937) である。アバディーヤ遺跡 B 墓地 (Petrie and Mace 1901)、ナカダ遺跡大墓地、同 B 墓地、同 T 墓地 (Baumgartel 1970; Petrie and Quibell 1896) に関しては、報告書は刊行されているが、掲載墓は一部のみであり、出版物のみからでは墓域全体の様相を窺い知ることはできない。ただし、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン (University College London: UCL) ピートリー博物館のアーカイブには、ピートリーらによるフィールドノートが所蔵されており、本稿ではそれらの記載内容から情報を補い、比較分析を行うこととした。アビュドス U 墓地に関しては、現在も発掘が継続中、ないしは整理作業中であって、発掘調査の成果は一部の報告書や概報によらざるをえない⁵⁾。従ってこれらの墓地遺跡に関しては、必ずしも画一的な分析項目を設定した上での横断的分析ができていないが、現状で俎上に乗せることが可能な事例を収集した。

対象遺跡は分布に合わせて大きく 9 つの地域⁶⁾に分類

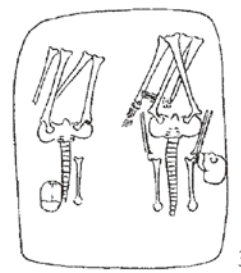
タイプI



1303号墓



263号墓

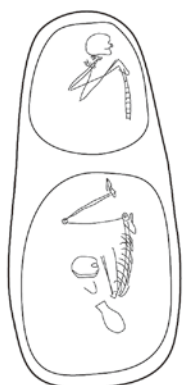


362-363号墓

タイプII



B62号墓



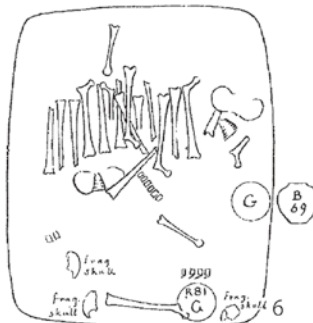
B107号墓



※ 1-3, 5-8: S=1/40

※ 4は縮尺不明

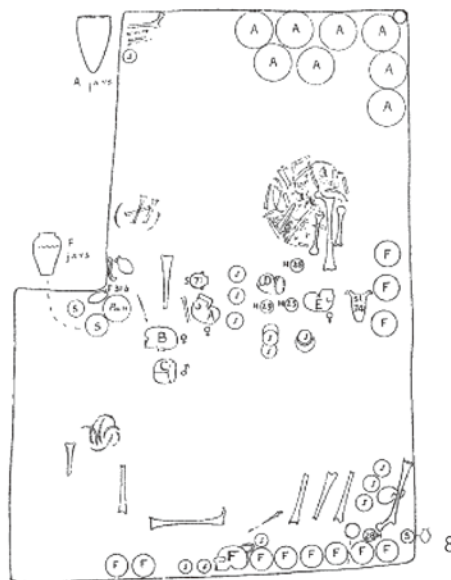
タイプIII



594号墓



880号墓



T5号墓

図2 ナカダ遺跡における合葬墓の例 (2, 3, 6-8: Petrie and Quibell 1896: Pls. LXXXII, LXXXIII)
(1: Book 136, 4: Book 71, 5: Book 70 からトレース、UCL ピートリー・エジプト考古学博物館より使用許諾)

表1 ナカダ文化期の編年

絶対年代 (cal BC)*	ヘンドリクス編年**	カイザー編年***	ピートリ編年****
3800/3750(?)–3400	I A	I a	30
	I B	I b	
	I C	I c	
	II A	II a	38
	II B	II b	
3400–3325	II C	II c	45
	II D1	II d1	
	II D2	II d2 / III a1	63
3325–3085	III A1	III a1	
	III A2	III a2	
	III B	III b1 / III b2 / III c1	78
3085–2867	III C1	III c2	
	III C2	III c3	
	III D	–	

* Stevenson 2016: Table 2, ** Hendrickx 2006, *** Kaiser 1957; 1990, **** Petrie 1920

表2 比較分析対象墓地における総墓数と合葬墓数、およびその割合

地域	遺跡名	地点・墓域名	合葬墓数	合葬墓の割合 (%)	報告書等掲載墓数	推定総墓数	発掘済み墓の割合	文献
カウ～マトマール	バダリ	3700 地点	1	1.96	51	51	全て	Brunton and Caton-Thompson 1928
	バダリ	3800 地点	1	2.17	46	46	全て	Brunton and Caton-Thompson 1928
	マトマール	2600–2700 地点	3	2.42	124	124	全て	Brunton 1948
	マトマール	3000–3100 地点	5	6.76	74	74	全て	Brunton 1948
	マトマール	5100 地点	1	3.85	26	26+	全て	Brunton 1948
	モスタゲッタ	1600–1800/ 11700 地点	7	3.98	176	176+	全て	Brunton 1937
ナガ・エッ＝デイル	ナガ・エッ＝デイル	N7000 地点	140	22.08	634	634	全て	Lythgoe and Dunham 1965
アビュドス	サルマニー	–	1	0.73	136	136	全て	el-Sayed 1979
	アビュドス	U 墓地	44	10.73	410	650+	部分	Hartmann 2016
	マハスナ	H 墓地	7	5.19	135	約 600	部分	Ayrton and Loat 1911
アバディーヤ	アバディーヤ	B 墓地	33	12.79	258	570	部分	Petrie and Mace 1901
ナカダ	ナカダ	主墓地	53	3.82	1385	約 2000	全て	Petrie and Quibell 1896, Fawcett 1902
	ナカダ	B 墓地	14	12.50	112	約 130	全て	Petrie and Quibell 1896, Fawcett 1902
	ナカダ	T 墓地	8	15.38	52	58	全て	Petrie and Quibell 1896, Fawcett 1902
	バラス北	–	9	4.64	194	254?	ほぼ全て	Podzorski 1994
アルマント	アルマント	1400–1500 地点	5	2.96	169	169	全て	Mond and Myers 1937
アダイマ	アダイマ	西墓地	32	17.88	179	500+	大部分	Crubézy et al 2002
エルカブ	エルカブ	Site 24	13	13.68	95	95+	全て	Hendrickx 1994
ヒエラコンポリス	ヒエラコンポリス	HK27 地点	7	2.58	271	271+	大部分	Adams 1987

「–」は地点名や墓域名が無いことを示す。

した (1. カウ～マトマール、2. ナガ・エッ＝デイル、3. アビュドス、4. アバディーヤ、5. ナカダ、6. アルマント、7. アダイマ、8. エルカブ、9. ヒエラコンポリス)。各墓地が属する地域に関しても表2を参照されたい。

2-2. 分析方法

まず当該遺跡における事例を抜粋した。この情報を基に、遺跡間での比較分析を行った。比較分析では、遺跡ご

とに、墓域を構成する墓すべての中で合葬墓が占める割合を求めた。ただし、分析対象となる遺跡の中には、墓域全体が発掘されていない事例や、資料が散逸した事例も存在するため、分析に当たってはまず墓域内のすべての墓が発掘された事例を検討し、次に一部のみが発掘された墓域の検討を行った。その上で、通時的な時間軸の中で、時期ごとの合葬墓の構成人数の変遷を検討し、地域単位での合葬墓の特徴の看取を試みた。なお、ヒエラコンポリス遺跡

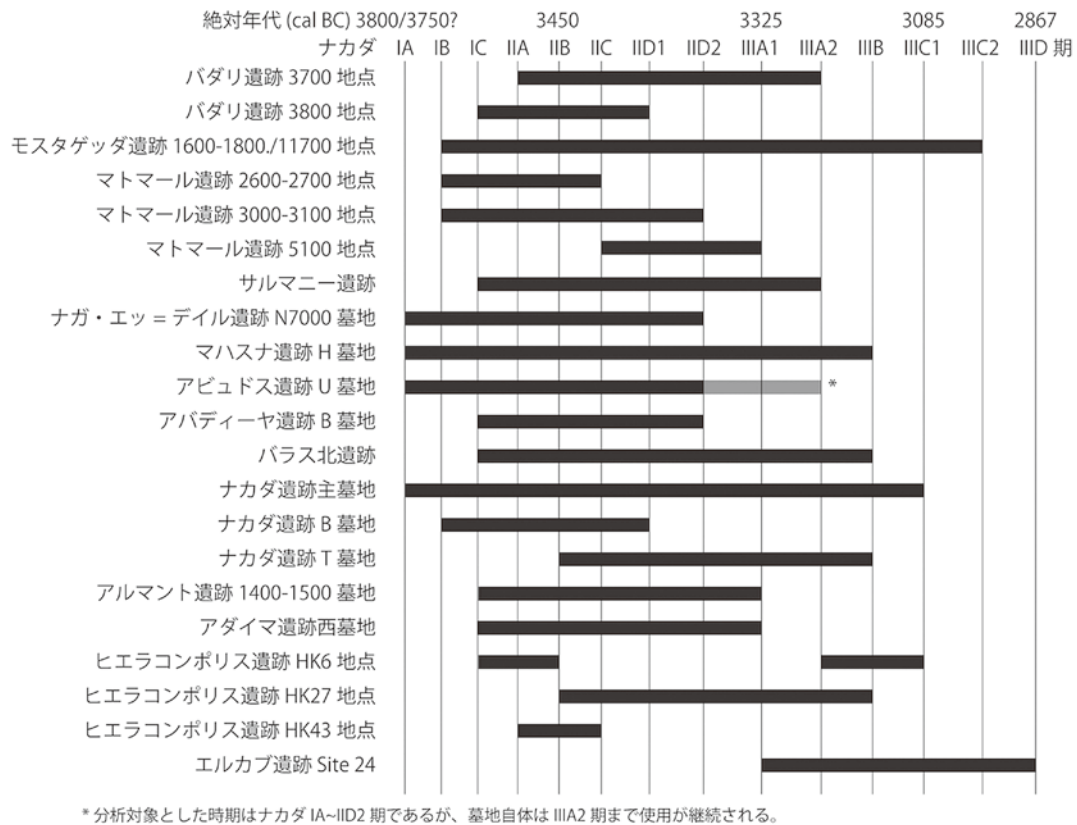


図3 比較分析対象墓地の存続期間

HK6 地点に関しては、合葬墓は見られるものの、同時代の他の遺跡と比較して遺構や埋葬の特徴に大きな違いが見られるため (cf. Friedman 2008b; 馬場 2014) 比較分析では扱わず、考察で触れることとした。

3. 分析結果

3-1. 合葬墓の割合に関する比較分析

上記の対象遺跡から、合計で 384 基の合葬墓を抽出できた。表 3 に、各遺跡における合葬墓の数を時期別に示した。表 3 中の時期特定不可墓の内訳は、表 4 に示している。

まず墓域を構成する墓の全て、もしくはほぼ全てが発掘され、各種資料でそれらの情報が確認できる遺跡に関しては、ナカダ I~III B 期を通期で見ると、全体の墓に対して合葬墓が確認された割合が、約 22.1% と高い値を示したナガ・エツ＝デイル遺跡 N7000 地点に加え、アダイマ遺跡西墓地やエルカブ遺跡に見られるように 13% 以上となる場合があった一方、アルマント遺跡 1400-1500 墓地やパラス北遺跡のように 5% 以下になる場合が確認された。ナガ・エツ＝デイル遺跡 N7000 地点における合葬墓の割合は際立って高い。カウ～マトマール地域の墓地群では、墓域あたりの合葬墓の数が 1 基の場合があるが、同地域では、涸れ川やガリーなどによって細かく開析された低位砂

漠縁辺部に墓域が立地するため、構成墓数 100 基程度、もしくは 50 基程度となるなど、造営される墓の総数自体が限定されている点を考慮する必要がある (Brunton 1937, 1948; Brunton and Caton-Thompson 1928; Brunton et al. 1927; Holmes and Friedman 1994)。サルマニー遺跡では 136 基中確認された合葬墓は 1 基のみであり、合葬墓の存在は稀である。

次に墓域全体の情報が一部のみの事例でも合葬墓と単葬墓の割合は、10% を超える場合とおおよそ 5% かそれ以下の場合の双方の特徴が確認された⁷⁾。ナカダ I B 期から使用され始め、II D1 期で廃絶するナカダ遺跡 B 墓地もアビュドス遺跡 U 墓地と同様、使用期間に比して比較的多数の合葬墓が存在する点は注目される。ナカダ遺跡大墓地における合葬墓の割合はおおよそ 3.8% に止まるが、この値は全体の 2/3 の墓の情報に基づいた結果であり、確認が不可能であった墓を考慮してもこの割合に大きな違いは生じないと推定される。マハスナ遺跡 H 墓地に関しては、発掘者によれば、発掘の時点で既に墓地全体で盗掘が進んでいたとあり (Ayrton and Loat 1911)、元来の墓地の規模を評価することは難しい。

表3 比較分析対象墓地における合葬墓の時期別一覧

地域	遺跡名	地点名・墓域名	I A	I B	I C	I A-C 計	II A	II B	II A-B 計	III 前期前半計	II C	II D1	II D2	II C-D 後半計	III A1	III A2	III B	III A-B 計	III 計	時期特定不可	時期不明	総計		
カウ〜マトマール	バダリ	3700 地点	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	バダリ	3800 地点	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	マトマール	2600-2700 地点	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	マトマール	3000-3100 地点	0	0	2	0	2	0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3		
	マトマール	5100 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1		
ナガ・エツ=デイル	モスタゲツダ	1600-1800/11700 地点	0	1	0	4	5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	7	
	ナガ・エツ=デイル	N7000 地点	0	0	5	15	20	15	20	1	36	20	0	0	8	28	0	0	0	0	2	54	140	
アビュドス	サルマニー	—	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	アビュドス	U 墓地	6	0	2	13	21	0	0	6	6	0	0	2	2	4	0	0	0	0	7	5	44	
アバディーンヤ	マハスナ	H 墓地	0	1	5	0	6	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	
	アバディーンヤ	B 墓地	2	0	3	4	9	0	0	0	0	0	2	2	4	0	0	0	0	0	6	14	33	
	ナカダ	主墓地	1	4	9	0	14	1	7	0	8	2	1	1	0	4	0	1	3	0	4	0	23	
	ナカダ	B 墓地	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	12	
アルマント	ナカダ	T 墓地	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	5	
	アルマント	ハラス北	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	6	0	9	
エルカブ	アルマント	1400-1500 地点	0	0	2	0	2	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	アダイマ	西墓地	0	0	3	0	3	2	0	0	2	3	0	2	0	5	1	0	0	1	6	15	32	
ヒエラコンポリス	エルカブ	Site 24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	6	0	0	9	3	1	13	
	ヒエラコンポリス	HK27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3	0	0	3	0	7	

「—」は地点名や墓域名が無いことを示す。

表4 表3中の時期特定不可墓の詳細

遺跡名	地点名・墓域名	推定時期別墓数
モスタゲツダ	1600-1800/11700 地点	I-II B: 1
ナガ・エツ=デイル	N7000 地点	II B-C: 2
アビュドス	U 墓地	I C-II A: 5, II A+II C-D1: 1, II A-C: 1
アバディーンヤ	B 墓地	I A-II B?: 1, I A-II C?: 1, II B-II A?: 1, II B-C?: 3
アダイマ	西墓地	I C-II B, II D2: 2, I C-II B?: 1, I C-II B?: 1, II B-C?: 1, II D2-III A1?: 1
エルカブ	Site 24	cf. III C1: 1, III D: 2
ヒエラコンポリス	HK27	II D2-III A1: 2, III C1: 1

3-2. 合葬墓の造営時期と合葬墓一基あたりの被葬者の人数に関する分析

本節では、前節で把握した傾向について詳しく観察するために地域ごとの合葬墓の傾向を、合葬墓の造営時期と墓坑一基あたりの被葬者人数から把握することを試みる。以下では、合葬墓の造営を大きく時期ごとに捉えるために、ナカダ I 期、II 期前半 (II A-B 期)、II 期後半 (II C-D2 期)、III 期前半 (III A1-B 期) の 4 つの時期的まとまりに基づき記述を行う。合葬墓の遺跡別の墓坑一基あたりの被葬者人数の詳細は、表 5、および表 6 に示した。

3-2-1. カウ～マトマール地域

本地域では、合葬墓はナカダ I 期に 8 基、II 期前半に 4 基、II 期後半に 2 基が確認された。このほかに I-II 期前半が 1 基存在する (モスタゲッダ遺跡 1587 号墓)。このことから、主として合葬墓はナカダ文化期の前半までに造営されたことが看取される。合葬墓の頻度はモスタゲッダ遺跡の 5 基 (I 期) を除き、1-2 基程度であり、墓地間に顕著な差は見られない。本地域の合葬墓は全て 2 人埋葬で、3 人以上の埋葬は確認されなかった。

3-2-2. ナガ・エツ＝デイル地域

本稿で取り扱った墓地の中では例外的に合葬墓の割合が

高い。すなわちナカダ I 期に 20 基、II 期前半に 36 基、II 期後半に 28 基であり、合葬墓は継続的に造営された。この中で、2 人が埋葬された墓は 85 基で、全体のおよそ 60% である。その一方で 3 人埋葬や 4 人埋葬なども多く、5 人以上が埋葬される場合も見られる。7 人分の遺体が埋葬された墓は II 期前半に 1 基のみだが、6 人以下の遺体を納めた墓は、継続して造営された。

3-2-3. アビュドス地域

2 か所の墓地に、合計で 27 基のナカダ I 期の合葬墓が確認された。これは本地域で確認された 52 基の合葬墓の 5 割強を I 期の合葬墓が占めることを示す。特に、マハスナ遺跡の場合、確認できた 7 基のうち 6 基が I 期である。また、アビュドス遺跡 U 墓地の場合も I 期に 21 基と、墓地内の 5 割弱を占める。一方でサルマニー遺跡の場合は II B 基の墓 1 基のみであった。このサルマニーの事例とマハスナ遺跡の II A 期墓 1 例を除き、II 期以降の事例はアビュドス遺跡 U 墓地のみで確認され、II 期前半までの墓が計 32 基と、全体の約 85% を占めた。合葬墓一基あたりの人数は、サルマニー遺跡とマハスナ遺跡では全て 2 人であった。対してアビュドス遺跡 U 墓地は、2 人埋葬が主体的だが、3 人埋葬や 4 人埋葬も見られる。3 人埋葬・4 人埋葬は、1 例を除き II 期前半までだった⁸⁾。

表 5 比較分析対象墓地における合葬墓の埋葬人数別一覧

地域	遺跡名	地点名・墓域名	2人	3人	4人	5人以上	人数不確か
カウ～マトマール	バダリ	3700 地点	1	0	0	0	0
	バダリ	3800 地点	1	0	0	0	0
	マトマール	2600-2700 地点	3	0	0	0	0
	マトマール	3000-3100 地点	5	0	0	0	0
	マトマール	5100 地点	1	0	0	0	0
	モスタゲッダ	1600-1800/11700 地点	7	0	0	0	0
ナガ・エツ＝デイル	ナガ・エツ＝デイル	N7000 地点	85	28	12	13	2
アビュドス	サルマニー	—	1	0	0	0	0
	アビュドス	U 墓地	34	9	1	0	0
	マハスナ	H 墓地	7	0	0	0	0
アバディーヤ	アバディーヤ	B 墓地	19	6	3	1	4
ナカダ	ナカダ	大墓地*	37	8	3	2	3
	ナカダ	B 墓地*	10	2	1	0	1
	ナカダ	T 墓地*	2	2	0	4	0
	バラス北	—	8	0	1	0	0
アルマント	アルマント	1400-1500 地点	4	1	0	0	0
アダヤマ	アダヤマ	西墓地	29	2	0	1	0
エルカブ	エルカブ	Site 24	9	3	0	1	0
ヒエラコンポリス	ヒエラコンポリス	HK27 地点	6	0	1	0	0
計			269	61	22	22	10

*ノート上で確認できた事例のみ。
「—」は地点名や墓域名が無いことを示す。

表6 合葬墓構成人数の種類が複数確認された比較分析対象墓地における合葬墓数の人数別/時期別一覧

埋葬人数	I	IIA	IIB	IIC	IID	IIIA	IIIB	時期特定不可	時期不明	計
ナガ・エツ=デイル遺跡 N7000 墓地										
2人	5	8	17	14	3	0	0	II B-C: 1	37	85
3人	7	4	3	2	1	0	0	II B-C: 1	10	28
4人	3	1	0	2	1	0	0	—	5	12
5人	2	1	1	1	0	0	0	—	1	6
6人	2	0	0	1	2	0	0	II A-B: 1	0	6
7人	0	1	0	0	0	0	0	—	0	1
人数不確か	0	0	0	0	1	0	0	—	1	2
アビュドス遺跡 U 墓地										
2人	18	0	0	0	3	0	0	I C-II A: 2, II A-B: 5, II A-C: 1, II C-D: 1	4	34
3人	3	0	0	0	0	0	0	I C-II A: 2, II A-B: 2, II A+C-D1: 1	1	9
4人	0	0	0	0	0	0	0	I C-II A: 1	0	1
アバディーヤ遺跡 B 墓地										
2人	4	0	0	0	2	0	0	I-II B: 1, I A-II C: 1, II C-D: 2	9	19
3人	2	0	0	0	0	0	0	—	4	6
4人	1	0	0	0	0	0	0	II B-C?: 1	1	3
5人	0	0	0	0	0	0	0	I B-II A: 1	0	1
人数不確か	2	0	0	0	0	0	0	II B-C?: 2	0	4
バラス北遺跡										
2人	0	1	0	0	0	0	1	II 初+II 中: 1, II 中: 1, II D+III B: 1, III A-B: 1, III A+B: 2	0	8
4人	0	0	0	0	0	0	0	II 初+II 中: 1	0	1
ナカダ遺跡大墓地										
2人	12	1	3	1	2	0	2	—	16	37
3人	1	0	0	0	0	1	1	—	5	8
4人	1	0	1	1	0	0	0	—	0	3
5人	0	0	1	0	0	0	0	—	0	1
7人	0	0	1	0	0	0	0	—	0	1
人数不確か	0	0	1	0	0	0	0	—	2	3
ナカダ遺跡 B 墓地										
2人	0	0	1	0	0	0	0	—	9	10
3人	0	0	0	1	0	0	0	—	1	2
4人	0	0	0	0	0	0	0	—	1	1
人数不確か	0	0	0	0	0	0	0	—	1	1
ナカダ遺跡 T 墓地										
2人	0	0	0	0	0	0	0	—	2	2
3人	0	0	0	0	1	0	0	—	1	2
6人	0	0	0	1	0	0	0	—	1	2
7人	0	0	1	0	0	0	0	—	1	2
アルマント遺跡 1400-1500 地点										
2人	2	1	1	0	0	0	0	—	0	4
3人	0	0	0	0	0	0	0	—	1	1
アダイマ遺跡西墓地										
2人	1	2	0	3	2	1	0	I C-II B+II D2: 2, I C-II B+III A1?: 1, II B-C?: 1, II D2-III A1?: 1	15	29
3人	1	0	0	0	0	0	0	I C-II B?: 1	0	2
6人	1	0	0	0	0	0	0	—	0	1
エルカブ遺跡 Site24										
2人	0	0	0	0	0	6	0	III C1: 1, III D: 1	1	9
3人	0	0	0	0	0	3	0	—	0	3
5人	0	0	0	0	0	0	0	III D: 1	0	1
ヒエラコンポリス遺跡 HK27 地点										
2人	0	0	0	0	1	3	0	II D2-III A1: 1, III C2: 1	0	6
4人	0	0	0	0	0	0	0	II D2-III A1: 1	0	1

3-2-4. アバディーヤ地域

I期からII期後半を通じて合葬墓が認められた。造営時期が明確な事例はI期とII期後半のみだが、I基からII期半ばまでの年代幅の事例が3基あり、II期前半の合葬墓の存在も否定しえない⁹⁾。年代が明らかな19基の内、ナカダI期の墓は9基のみで、年代不明な14基分を考慮すると、I期に合葬墓の造営頻度が高いかは確認しがたい。また、2人埋葬が19基確認される一方、5人埋葬1基を含む3人以上の埋葬が9基存在するなど、合葬墓の一基あたりの被葬者数は多様である。3人埋葬・4人埋葬に関しては、おそらくII期中盤までの造営と考えられる。

3-2-5. ナカダ地域

ナカダ遺跡大墓地では、存続期間を通じて合葬墓が確認された。大墓地のみで確認されたナカダI期の14基分をピークに、大墓地の合葬墓はその後数が少なくなる。ナカダ遺跡B墓地に関しては、II期前半と後半に1基ずつと、時期が確定できる墓は少ない。II期前半と後半に合葬墓が見られる点は、ナカダ遺跡T墓地でも同様である。バラス北遺跡では、合葬墓の年代は、II期前半からIII期後半の範囲で見られるが、ポゾルスキーが再利用墓とする事例を除けば、II期前半とIII期に1基ずつのみである (Podzorski 1994: 47-49)。なお一基あたりの被葬者の数は、ナカダ遺跡大墓地・B墓地で2人埋葬が多数を占め、さらに3人以上の埋葬も存在する。大墓地では、5人以上の埋葬事例も見られる。バラス北遺跡のほとんどは2人埋葬で、1基のみ4人埋葬である¹⁰⁾。時期的には、ナカダ遺跡大墓地では、2人埋葬が存続期間を通じて見られ、I期に最も多い。3人埋葬はI期と、III期に造営時期が分かれる。5人埋葬と、7人埋葬はともにII期前半である。ナカダ遺跡B墓地では、2人埋葬の墓はII期前半、3人埋葬の墓はII期後半である。T墓地ではII期前半に7人埋葬が、II期後半に6人埋葬と3人埋葬が1基ずつ確認される。バラス北遺跡では、2人埋葬のうち、同時埋葬墓はII期前半とIII期に確認された。

3-2-6. アルマント地域

ナカダI期とII期前半に2基ずつが認められた。墓地内の墓の総数が169基であることを考慮すると、合葬墓の造営は極めて少ない。この中で、3人埋葬も1例確認されたが、残りは2人埋葬で、4人以上の遺体を納めた事例はなかった。

3-2-7. アダイマ地域

ナカダI期に3基、II期前半に2基、II期後半に5基、III期に1基と継続的に合葬墓が確認できる。しかし、時期

不明墓が15基と全体のおよそ46%に及び、墓地の存続期間中最も多く合葬墓が造営された時期は看取できない。墓一基あたりの人数に関しても2人埋葬が全体のおよそ90%の29基を占め、3人埋葬や5人以上の埋葬は少数に過ぎない。3人以上の遺体を含む場合は、ナカダ文化期前半に造営が多く認められることが特徴的である。

3-2-8. エルカブ地域

ナカダIII期前半のうち、特にIII A1-2期に合葬墓が確認され、III B期の事例は見られない。ただし、II C1期以降には合葬墓2基は認められる。被葬者の人数では、2人埋葬が最も多いが、3人埋葬もあり、また5人以上が埋葬された事例も1例存在した。3人埋葬はIII A1期とIII A2期の双方に存在する一方で、5人埋葬はIII D期のみである。

3-2-9. ヒエラコンポリス地域

ナカダII期後半に1基、III期前半に3基が、またII期後半-III期前半に2基、III C1期に1基が確認されることから、断続的な合葬墓の造営が看取される。これらの合葬墓は1例の例外を除いて全て2人埋葬であった。例外の4人埋葬は、II期後半-III期前半の墓であり、本墓地の存続期間のほぼ中間期に造営されたことが確認できた。

3-3. 小結

以上の比較分析から、対象のナカダ文化墓地において、合葬墓はある時期に造営が集中する場合と、通時的に造営される場合の双方が確認された。

ある時期に造営が集中する場合に関しては、ナカダI期から使用された墓地において見られ、I期～II期前半に合葬墓が多く見られることが確認される。これらの事例としては、バダリ、モスタゲッダ、マトマール、サルマニー、アビュドスU墓地、マハスナ、アバディーヤ、ナカダ大墓地の各遺跡が該当する。この中でもアビュドス遺跡U墓地やナカダ遺跡大墓地では、I期における合葬墓の造営頻度は多く、ミダン=レーヌの説明 (Midant-Reynes 2000: 47) を具体的に追認する結果となった。上記の諸墓地の所在地が多岐に亘ることからわかるように、この結果はナカダ文化期に共通し、地域差は見られないと言える。

一方で通時的に合葬墓が造営された事例としては、まず対象とした墓地の中では比較的后発のヒエラコンポリス遺跡HK27地点やエルカブ遺跡が挙げられ、造営に時期的な偏りは見られず、むしろ散発的な造営が断続的に行われたと看取される。エルカブ遺跡の造営時期は、ナカダIII期のみである点は考慮される必要はあるが、ナカダ文化墓地では概ね共通して、I期に比較的多く見られた合葬墓の造営が、II期以降では散発的な水準に留まっていたことが両

遺跡における合葬墓の造営から窺える。ただ本稿で対象とした墓地の中では、ナガ・エツ＝デイル遺跡は例外的な様相を示し、存続期間を通じて継続的におよそ5基に1基の高頻度で合葬墓が造営された点は、対象とした他の墓地では認められなかった。

被葬者の人数が確定できた墓は、2人埋葬が合計で269基、3人埋葬が59基、4人埋葬が22基、5人以上の埋葬が22基であったが、5人以上が埋葬された事例では、5人埋葬が9基、6人埋葬が8基、少なくとも6人埋葬が1基、7人埋葬が4基、であった。合葬墓一基あたりの埋葬人数でも、ナガ・エツ＝デイル遺跡は例外的であり、2人を主体に、3人・4人・5人以上の埋葬を、それぞれ6基・6基・1基有し、他の墓地遺跡の様相とは大きく異なる。また5人以上の埋葬に関しては、ナガ・エツ＝デイル遺跡の事例を含めてもナカダI期初期からIII期の範囲で見られ、造営時期の偏りなどは見出せなかった。ただし地域的には、カウ～マトマール地域の墓地群など3人以上の埋葬が見られない事例も存在した。

4. ナカダ文化合葬墓の性格に関する検討

本章では、ナカダ文化の合葬墓の性格を検討するため、まずナカダI期に比較的高頻度で同時埋葬墓が出現することの背景に前段階の文化との墓制上のつながりの有無を検討する。次いでこれまで渉猟した合葬墓の埋葬様式に関する検討を加え、各埋葬様式が見られる墓地の特徴やその成因を考察する。最後に国家形成期という大きな歴史的な流れの中で、墓地コンテクスト上で合葬墓が果たした役割を、ヒエラコンポリス遺跡HK6地点と、上記の分析で扱った諸遺跡との対比を通じて明らかにすることを試みる。

4-1. ナカダI期における合葬墓の高頻度

上記の結果、ナカダ文化の墓制にあっては、合葬墓は基本的にナカダI期からII期までに多く見られることが明らかとなった。従ってまずはこのナカダ文化初期に見られる合葬墓の比較的高い頻度について、ナカダI期の前段階に当たり、カウ～マトマール地域に代表的な遺跡が集中する新石器時代のバダリ文化 (Badarian Culture) またはいわゆるタサ文化 (Tasian Culture) と比較し、墓制上の関連性の有無を検討する必要がある。バダリ文化やタサ文化の合葬墓は、モスタゲッダ遺跡においてのみ確認され、前者は当該文化の墓全体の246基のうち12基で、後者は48基のうち4基であり、両者を合わせても294基のうち16基に過ぎなかった (Brunton 1937: Plates VII-X)。モスタゲッダ遺跡以外では合葬墓が確認されなかった点と、およそ600年間のバダリ文化の存続期間を考慮すると、合葬墓が造営される頻度は少なかったと考えられる。カウ～マト

マール地域では、ナカダI期においても合葬墓の造営頻度は低く、バダリ文化の終焉とナカダ文化の開始との間に大きな変化は見られない。カウ～マトマール地域以外では、バダリ文化期の墓地遺跡の発見事例はごく少数にとどまるため、ナカダ文化期の墓地遺跡との比較から、ナカダI期における合葬墓の造営頻度の高さの理由を求めることは困難である。現状では、ナカダI期の上エジプトでは合葬墓造営の頻度が比較的高く、ナカダII B-C期以降は、ナカダ遺跡やアビュドス遺跡といった多数の墓坑を有し、かつ存続期間が長い墓地であっても基本的には段階的に合葬墓の事例数が減少し、カウ～マトマール地域に立地する小規模墓地群ではII期後半以降にはほぼ合葬墓が見られなくなるという、事実関係のみが押さえられる。

4-2. 合葬墓の埋葬様式とその成因

分析で取り扱った合葬墓の埋葬様式に関しては、筆者 (黒沼 2017) がナカダ遺跡の分析の中で認めた同時埋葬墓 (タイプI) や、元ある墓に、一部が重なったり、隣接したりするように別の墓を造営した事例 (タイプII)、複数人数分の遺体を一つの墓に納める改葬墓 (タイプIII) は、一部の他の遺跡でも確認された。以下にタイプごとに看取できた特徴を記す。

タイプIの同時埋葬墓に関しては、本稿で行った集成で抽出できた合葬墓の大多数を占めた。すべてのナカダ文化の墓地で見られる合葬墓である。屈葬体勢の遺体が解剖学的な原位置を保ちながら部分的に重なっている事例や、遺体同士が互いに重ならず近接していながらいずれの遺体も原位置から大きく逸脱していない事例などであり、遺体を納める埋葬行為が一回で終了したことを示している。ナカダI期に多く見られるものの、ナカダ文化期を通じて散発的に造営された埋葬様式として捉えられる。その成因に関しては、多くの場合、母子埋葬などに代表される一回性の埋葬行為であると想定されてきた (cf. Thomas 2004: 1045-1047)。母子埋葬などの成因を考える上で、性別や年齢の判定の情報は不可欠であるが、古い時期に発掘が行われた遺跡に関しては、精度に疑義が示されている (Mann 1989)。ただし、近年調査が行われたアビュドス遺跡U墓地では、17基の大人と子どもの組み合わせが見られ、大人と新生児・乳児の組み合わせも4基見られた一方で、大人と子どもの組み合わせの中で、女性と子どもの組み合わせであった事例は6基で、男性と子どもの組み合わせであった事例が4基など、必ずしも組み合わせは女性と子どもに限定されない。大人と新生児・乳児の組み合わせが44基中4基であるので、産褥死も合葬墓の成因の一つではあるが、これも絶対的な造墓の成因ではないと考えられる。大人同士の組み合わせの合葬墓があることは、性別や

年齢の組み合わせを問わず偶発的な同時期死亡の結果として合葬墓が造営されたことを間接的に示している¹¹⁾。

タイプⅡの事例に関しては、管見に触れた限りでは、ナカダ遺跡B墓地のみで観察された。考古学一般では、分節墓地 (segmented cemetery) において墓坑が接続した分布を示すことがあり、親族組織や系統に基づく分節社会がその成因の背景にあるとされる (cf. Goldstein 1981; Parker Pearson 1999)。ナカダ遺跡B墓地の墓坑分布は、墓坑が集中する区画が南北に分かれており、北側にタイプⅡの墓が多く見られる (黒沼 2017)。この分布状況から、ナカダ遺跡B墓地では親族組織を埋葬の原理とした墓地が形成されたと推測することが可能だろう。ヒエラコンポリス遺跡HK43地点では、親族組織を原理とした埋葬の結果、円環状に墓坑が分布した墓地が形成されたが (Friedman et al. 1999)、ナカダ遺跡B墓地の場合は、HK43地点とは異なった墓坑分布の墓域が形成されたと考えられる。

タイプⅢの改葬墓に関しては、ナカダ遺跡ではナカダⅡB～ⅡC期に大墓地とT墓地において、遺体の骨が解剖学的な原位置を逸脱した状態で配置された改葬墓が少なくとも5基存在することが知られている (Petrie and Quibell 1896; 黒沼 2017: 表5)。約4×2.48mの規模を有するT墓地のT5号墓では6人分の遺体と50点以上の副葬品が見つまっている。また、同様な改葬行為が見られる墓は、アバディーヤ遺跡やナガ・エッ＝デイル遺跡などにおいても発見されている。5人が埋葬されたアバディーヤ遺跡B102号墓 (Petrie and Mace 1901: 33) は、ピートリーによればSD33-41の年代幅に位置付けられ (Petrie 1920: Plate LII)、ヘンドリクス編年のⅠ期半ばからナカダⅡ期初頭に相当するため、時期的には若干ナカダ遺跡T墓地に先行するが、規模の大きな墓坑に多数の副葬品¹²⁾とともに複数の遺体が埋葬されるという特徴は共通性を有する。またナガ・エッ＝デイル遺跡においても類似した改葬行為を伴う合葬墓が検出されている (Girardi 2017; Lythgoe and Dunham 1965)。ⅡD期とされる同遺跡のN7522号墓 (規模: 2.05×1.40×1.15 m) は土器を主体とした31点の副葬品に、頭部以外の骨を欠く4人分の埋葬が検出されている。このことから、ナカダ遺跡やアバディーヤ遺跡の事例と合わせ、改葬行為を伴いかつ副葬品を多量に納めた合葬墓が、事例数は少ないもののⅡ期の上エジプトでは造営されていたことを示している。改葬墓の成因について、M. A. ホフマン (Hoffman) は、特にT5号墓に関しては、人身供儀 (human sacrifice) に関わる儀礼によるものとしている (Hoffman 1979: 116)。上記したようにナカダ遺跡T5号墓やアバディーヤ遺跡B102号墓、ナガ・エッ＝デイル遺跡N7522号墓などからは多量の副葬品が

発見されているが、人身供儀に伴って供献された物品であった可能性がある。ただし、改葬行為を伴う合葬墓であっても上記のような著しく大きな規模や多量の副葬品を含まない事例も存在する点には留意する必要がある。このような事例としてナカダ遺跡594号墓 (ⅡC期) や同880号墓 (ⅡB期) (Petrie and Quibell 1896) が挙げられるが、改葬行為に多量の副葬品を消費できるか否かは、儀礼の執行者の経済力などの差異を示している可能性がある。ナカダ遺跡で、多量の副葬品を伴う改葬墓が大墓地から離れて存在したT墓地に存在する点は、同様の改葬墓が他の墓と同じ墓域に存在するアバディーヤ遺跡やナガ・エッ＝デイル遺跡とは異なり、一般層の墓地では行われない埋葬儀礼がT墓地において行われるほどに、社会階層の分化が進展していたことを示していると考えられる。

4-3. 墓地コンテクストの中での合葬墓

ここまで3種の合葬墓の特徴や成因について述べてきたが、さらに着眼されるべきは、合葬墓がどのような墓地コンテクストの中で造営されたか、という点であろう。こうした事例で最も顕著な事例は比較分析で除外したヒエラコンポリス遺跡HK6地点である。同地点では、これまでに検出された76基の墓のうち合葬墓が31基を占めており、このうちナカダⅢ期の再利用墓を除いた、墓地の最初の使用期間であるⅠC-ⅡB期の墓に関しては27基が確認されている (Adams 2000; Friedman 2008a, 2008b; Friedman et al. 2011, 2017; Hoffman et al. 1982: 38-60; 馬場 2014)。HK6地点の合葬墓には、2人埋葬や3人埋葬といった、他の遺跡に見られる埋葬人数に加え、12人埋葬の事例 (23号墓) も存在するなど、他の遺跡では見られない事例も含む。これらの墓の大部分は、複数の埋葬関連遺構のまとまりからなる複合体 (complex) に含まれている。HK6地点の場合には、合葬墓は埋葬施設と有意に結びついて、埋葬に関わる複合体の一端を構成していたと考えられる。合葬墓の被葬者の中には矮人も見られることから、HK6地点では殉葬が行われていたとされ (馬場 2014)、同時期の他の遺跡ではこうした行為は見られない。ヒエラコンポリス遺跡以外では、同時埋葬墓は比較的多く見られるものの、ナカダ遺跡の場合にはT墓地はまだ使用が開始されておらず、合葬墓は単葬墓に混じって散発的に造営されてのみであって、特定の墓域に偏った造営は見られず、複合体も見られない。この点で、ⅠC期からⅡB期にかけては、ヒエラコンポリス遺跡以外の遺跡でも合葬墓自体は多く存在したものの、HK6地点で見られるような社会階層を顕著に反映した墓の造営はなされていなかったことを意味する。

ナカダⅡ期以降においても、同時埋葬墓に関しては、墓

地内でのコンテキストに大きな変化は見られず、最も一般的な単葬墓の一種の変形として、単葬墓と同様に機能したと思われる。ただし、上記したナカダ遺跡やアバディーヤ遺跡、ナガ・エツ＝デイル遺跡などに見られる改葬行為を伴う合葬墓が表れる点や、ナカダ遺跡 T 墓地における T15 号墓や T23 号墓といった明確に墓への追加埋葬を意図した構造を有する墓が出現する点は特筆される。I C-II A 期のヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点で見られた、特定の墓域への特定層の埋葬という墓制上の観念がナカダ遺跡では後発ながら II 期以降に現れた点は、改葬行為を伴う合葬墓や追加埋葬を前提とした構造の墓に埋葬された複数の遺体の存在から看取される。こうした同時埋葬墓以外の、合葬に関わる墓制はナカダ遺跡など先王朝時代の中心地遺跡で主に見られる点も留意され (Kemp 1987; Wilkinson 2000)、国家形成に向けた社会変化の流れの中で、一般層からエリート層の分化が進行し、埋葬儀礼に独自性を有し始めたことの一部として捉えられるだろう。ただ、中心地の墓地であってもアビュドス遺跡 U 墓地では、II D 期までには同時埋葬墓以外の埋葬様式は確認しえなかった。最終報告が公刊されていない現状では、今後事実関係が変更されることが多いに予想され、改葬行為などが存在する可能性も否定しえない。

5. 結語：まとめに代えて

本稿では、上エジプトのナカダ文化に見られる合葬墓は、それが単なる偶発的な同時期死に起因する同時埋葬墓の造営のみならず、改葬墓など別種の埋葬様式を含み、それらが上エジプト地域において様々な様相を呈していることを明らかにしてきた。以下、ナカダ文化期の上エジプトにおける合葬墓に関わる墓制上の特徴を要約する。

- 1) 同時埋葬墓は、ナカダ I-III 期を通じて散発的に造営されるが、特に I 期から II 期前半にかけて造営される頻度が高い。この傾向は、ナガ・エツ＝デイル遺跡を除いて分析対象となったすべての遺跡に当てはまる。
- 2) ナカダ I 期から II 期前半にかけて同時埋葬墓が造営される頻度が高い背景と、バダリ文化の墓制の関連性は不明である。
- 3) ナカダ II 期には、数が少ないものの改葬墓や追葬墓が確認される。この種の埋葬様式は、比較的規模の大きな墓地に限られ、アルマント遺跡やカウ～マトマール地域の墓地群などの小規模な墓地には見られない。ただし、単葬の改葬墓はアダイマ遺跡などの複数の遺跡で確認される。規模が大きく、存続期間が長い遺跡では、合葬に関わる墓制は多様な傾向にある。
- 4) ナカダ I C-II A 期には、ヒエラコンポリス遺跡 HK6 地点では、合葬墓は埋葬複合体を構成する遺構の一つ

としての性格を有するが、他の遺跡では墓域内での他の埋葬関連遺構との関連を伴った造営はなされず、単葬墓との間にも有意な関係は見出せない。

- 5) ナカダ II 期には、ナカダ遺跡 T 墓地では墓域の分化と共に、改葬墓に加え、追加埋葬などを前提とした墓構造を持つ合葬墓が見られる。これは社会的に一般層の中からエリート層が分離していく中で、墓や埋葬行為に独自性を有し始めたことと関連すると思われる。
- 6) 一方で、ナカダ II 期には、ナカダ遺跡では大墓地においても改葬墓や追葬墓が見られる。ナガ・エツ＝デイル遺跡などでは墓域の分化はなく、既往の墓域でこれら新出の墓制が展開される。ただし、ナカダ遺跡では大墓地では改葬墓の規模や副葬品量などの点で T 墓地には及ばない。

これらの諸点は、合葬墓が、単葬墓が主体のナカダ文化墓制にあっても、単なる不規則的な埋葬としてだけでなく、時代ごとに少数ながら異なる埋葬様式が展開されたことを示している。この点で、合葬墓が存続期間を通じて高い割合で造営され、改葬合葬墓なども観察されたナガ・エツ＝デイル遺跡は特に異なる墓制上の特色を有すると言える。ただし、この時期的な推移は、裏返せば、II 期以降は合葬墓の造営が低調になることを意味しており、III C1 期の国家形成に向けて集権化が進み、その一環として単葬墓を主体とする埋葬様式への画一化が進んだと捉えられる。

本稿では、分析が可能な上エジプトに所在する遺跡から合葬の事例を横断的に渉猟し、関連する墓制の考察を試みたが、幾つかの問題点も残された。例えば、バラス北遺跡の再利用墓に関する議論は注意を払う必要がある (Podzorski 1994: 47-49)。切り合い関係に基づかない埋葬の先後関係についての検討は、文献や記録類に基づく場合は困難さを伴うが、特に学史の初期に発掘調査が行われた遺跡については、現在のところ同時埋葬墓として認識されていた墓に関しても、詳細な分析により所見が変わる可能性は否定できない。

また被葬者の性別・年齢についても特に古い発掘調査に関しては、鑑別の精度に疑問が指摘されており (Mann 1989)、本稿では横断的な分析の対象項目からは外した。古い発掘調査における鑑別に関する議論は近年でもなされているが (Beuthe 2013)、今後機会を改めて分析と検討がなされる必要がある。

謝辞

本論を草するにあたり、UCL ビートル・エジプト考古学博物館の学芸員であるアンナ・ガーネット (Anna Garnett) 博士から、ビートルらによるアバディーヤ遺跡、ナカダ遺跡のフィールドノート記載情報について本論文への使用のご許可を頂きました。ナカダ遺跡調査記録を資料見学した際に同博物館元学芸員であるアリス・ス

ティーヴンソン (Alice Stevenson) 博士 (現 UCL 考古学科上級講師) から多大なご協力を頂きました。また、お二方の査読者から貴重なコメントを賜りました。編集委員会の皆様には大変お世話になりました。末筆ではありますが、ここに記して御礼を申し上げます。本論は、公益財団法人高梨学術奨励基金 平成 25・27・28 年度若手研究助成からの研究助成を受けて実施された研究成果の一部である。

註

- 1) 下エジプトの諸遺跡では先王朝時代末期～初期王朝時代にかけての遺跡の発掘が近年盛んに進められているが、基本的に分析対象としては取り扱わない。
- 2) 比較分析に関しては、J. J. カスティヨス (Castillos) が、ナカダ文化の墓地遺跡の分析を実施し、合葬墓に関しても取り扱っている (Castillos 1982)。ただし彼は、単葬墓と 2 人埋葬墓を一括して扱っているほか、ピートリー (Petrie) による SD (Sequence dating) 編年 (Petrie 1920) や、W. カイザー (Kaiser) による段階編年 (Stufen Chronologie) (Kaiser 1957) など、遺跡ごとに時間軸が異なっており、遺跡の横断的な比較を困難にしている。
- 3) ナカダ文化の研究では、上エジプトのナイル河流域という広範な地理的範囲で見られる文化について大きく一体として捉える傾向にあった。だが近年では文化内容の地域差の存在が徐々に明らかにされつつある。例えば、アビュドス遺跡 U 墓地の詳細な分析と初期に発掘された遺跡からの出土資料との対照を通じて、微視的に見れば、同一の埋葬用土器型式の使用始期や終期が遺跡ごとによって微妙に異なること、そしてアセンブリッジを構成する器形の変遷に現れる埋葬儀礼自体の変遷が遺跡ごとに異なることなど、各遺物レベルとそれに立脚した文化的現象レベルでの遺跡間における編年上の微妙な相違点が指摘されている (Hartmann 2011)。ただ編年研究を行った R. ハートマン (Hartmann) は遺跡間での微妙な年代差の対応を整備するためには多大な労力がかかる旨を述べており (Hartmann 2011)、現状では整備はなされていないことから、本稿ではこうした微妙な編年上の齟齬については不問とせざるをえなかった。
- 4) 本稿では基本的にヘンドリクスによる土器編年を採用するが、この編年体系は提示からすでに 30 年近く経っており、ヘンドリクス氏本人に伺ったところ特にナカダ I 期の年代観は昨今のアビュドス遺跡 U 墓地での調査 (Hartmann 2016) などを経て、修正が必要とされる (ヘンドリクス氏私信, 2017 年 9 月)。しかしこれまでのところ、氏の編年に変わるより新しい編年体系は提示されていないため、本稿では氏の編年に順ずることとする。
- 5) アビュドス遺跡 U 墓地の調査史は複雑である。1985 年以降のドイツ考古学研究所 (Deutsches Archäologisches Institute: DAI) カイロ支部による調査は当地における 3 回目の調査であり、初めて行われた調査は 1895-96 年の É. アメリノー (Amélineau) による調査であるが、この調査に関しては実態が明らかでない (Amélineau 1899)。次いで E. ピート (Peet) によるエジプト探査基金 (Egypt Exploration Fund) の調査が実施され、報告書 (Peet 1914) が刊行されたが、同時代の報告書同様、掲載された墓の情報是一部にとどまり、今日エジプト探査協会に保管されている墓カードに関しても現存するものは一部にとどまる (Hartmann 2016)。DAI によって調査された墓は、前 2 者によって既に発掘された墓を一部含むものの、墓域内の全ての墓を発掘したものではない。なお、本稿では、ハートマンによる報告書に記載された被葬者の情報を参照したが、ナカダ III 期以降の墓に関しては取り扱われておらず、まとまった報告も公開されていないことから分析対象とすることができなかった。
- 6) なお、これらの単位の設定は、本稿で分析の対象となる遺跡の所在地に基づいており、王朝時代以降のノモス (nome) などに基づいたものではない点は留意されたい。
- 7) このうち、墓域を構成した墓のおよそ 2/3 の事例が得られたアビュドス遺跡 U 墓地に関しては、ナカダ I A 期から II D2 期までの合葬墓の頻度である点は留意される。
- 8) ただし、年代幅が明確に確定できず、I C-II A 期といった年代の把握のみにとどまる事例がある点は留意する必要がある。
- 9) 本遺跡では、現状で得られる明確な相対年代は SD 編年のみであり (Petrie 1920: Pl. LII)、ヘンドリクスの編年案と必ずしも正確に対応しづらい点がある。
- 10) ただし、II 期前半と中ごろに 2 度の埋葬段階があった再利用を受けた墓とされる。
- 11) ナガ・エツ＝デイル遺跡の抽出できた 140 基の合葬墓のうち、被葬者の年齢の組み合わせは、大人と子どもが 50 基、大人同士が 48 基、大人と新生児が 9 基などであった (Lythgoe and Dunham 1965)。ここから、ナガ・エツ＝デイル遺跡では、合葬墓に納められる被葬者の組み合わせとしては、大人と子どもが多数ではあるが、大人同士の事例も少なからず存在することが浮かび上がる。本遺跡では例外的に多数の合葬墓が造営されることを考慮する必要があるが、アビュドス遺跡と同様に合葬墓の主たる成因は、同時期に死亡した被葬者の埋葬にあると見られる。
- 12) 報告がなされていないため B102 号墓から出土した副葬品の総数は定かではないが、例えばオクスフォード大学付属アシュモレアン (Ashmolean) 博物館には、石製容器やパレット、タスク (Tusk) やタグ (Tag) などの遺物が少なくとも 30 点が所蔵されており (Payne 1993)、副葬品数は多い。

参考文献

- Adams, B. 1987 *The Fort Cemetery at Hierakonpolis*. London, KPI.
- Adams, B. 2000 *Excavations in the Locality 6 Cemetery at Hierakonpolis 1979-1985*. BAR International Series 903. Oxford, Archaeopress.
- Amélineau, É. 1899 *Les nouvelles fouilles d'Abydos I (1895-1896)*. Paris, Ernest Leroux.
- Ayrton, E. R. and W. L. S. Loat 1911 *The Pre-dynastic Cemetery at El Mahasna*. London, Egypt Exploration Fund.
- Bard, K. A. 1994 *From Farmers to Pharaohs: Mortuary Evidence for the Rise of Complex Society in Egypt*. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Baumgartel, E. J. 1970 *Petrie's Naqada Excavation: A Supplement*. London, Bernard Quaritch.
- Beuthe, T. 2013 On the Validity of Sexing Data from Early Excavations: Examples from Qau. *The Journal of Egyptian Archaeology* 99: 308-311.
- Brunton, G. 1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*. London, Bernard Quaritch.
- Burton, G. 1948 *Matmar*. London, Bernard Quaritch.
- Brunton, G. and G. Caton-Thompson 1928 *The Badarian Civilization and Predynastic Remains near Badari*. London, Bernard Quaritch.
- Brunton, G., A. Gardiner and W. M. F. Petrie 1927 *Qau and Badari I*. London, Bernard Quaritch.
- Campagno, M. 2003 Space and Shape: Notes on Pre- and Proto-State Funerary Practices in Ancient Egypt. In S. Bickel and A. Loprieno (eds.), *Basel Egyptology Prize 1: Junior Research in Egyptian History, Archaeology, and Philology*, 13-26. Basel, Schwabe.
- Campagno, M. 2011 Kinship, Concentration of Population and the Emergence of the State in the Nile Valley. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at Its Origins 3*, 1229-1242. Leuven, Peeters.

- Castillos, J. J. 1982 *A Reappraisal of the Published Evidence on Egyptian Predynastic and Early Dynastic Cemeteries*. Toronto, Benben Publications.
- Crubézy, É., S. Duchesne and B. Midant-Reynes 2008 The Predynastic Cemetery at Adaima (Upper Egypt): General Presentation and Implications for the Populations of Predynastic Egypt. In B. Midant-Reynes and Y. Tristant (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, 289-310. Leuven, Peeters.
- Crubézy, É., T. Janin and B. Midant-Reynes 2002 *Adaima II: La nécropole prédynastique*. Le Caire, Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Fawcett, C. D. 1902 A Second Study of the Variation and Correlation of the Human Skull, with Special Reference to the Naqada Crania. *Biometrika* 1: 408-467.
- Friedman, R. F. 2008a Excavating Egypt's early kings: Recent discoveries in the elite cemetery at Hierakonpolis. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, 1157-1194. Leuven, Peeters.
- Friedman, R. F. 2008b The Cemeteries of Hierakonpolis. *Archéo-Nil* 18: 8-29.
- Friedman, R. F., A. Maish, A. G. Fahmy, J. C. Darnell and E. D. Johnson 1999 Preliminary Report on Field Work at Hierakonpolis: 1996-1998. *Journal of American Research Center in Egypt* 34: 1-35.
- Friedman, R. F., W. van Neer, B. de Cupere and X. Droux 2017 The Elite Predynastic Cemetery at Hierakonpolis HK6: 2011-2015 Progress Report. In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at Its Origins 5*, 231-290. Leuven, Peeters.
- Friedman, R. F., W. van Neer and V. Linseele 2011 The Elite Predynastic Cemetery at Hierakonpolis: 2009-2010 update. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at Its Origins 3*, 157-198. Leuven, Peeters.
- Girardi, C. 2017 Diversity in Body Treatment in the Predynastic Cemetery at Naga ed-Deir (N 7000). In B. Midant-Reynes, Y. Tristant and E. M. Ryan (eds.), *Egypt at Its Origins 5*, 291-310. Leuven, Peeters.
- Goldstein, L. 1981 One-Dimensional Archaeology and Multidimensional People: Spatial Organization and Mortuary Analysis. In R. Chapman, I. Kinnes and K. Randsborg (eds.), *The Archaeology of Death*, 53-70. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hartmann, R. 2011 Some Remarks on the Chronology of the Early Naqada Culture (Naqada I / Early Naqada II) in Upper Egypt. *Archéo-Nil* 21: 21-32.
- Hartmann, R. 2016 *Umm el-Qaab IV: Die Keramik der älteren und mittleren Naqadakultur aus dem prädynastischen Friedhof U in Abydos (Umm el-Qaab)*. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Hendrickx, S. 1994 *Elkab V: The Naqada III Cemetery*. Bruxelles, Musée Royaux d'Art et d'Histoire.
- Hendrickx, S. 1996 The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities. In A. J. Spencer (ed.), *Aspects of Early Egypt*, 33-69. London, British Museum Press.
- Hendrickx, S. 1999 La chronologie de la préhistoire tardive et des débuts de l'histoire de l'Égypte. *Archéo-Nil* 9: 13-81.
- Hendrickx, S. 2006 Predynastic-Early Dynastic Chronology. In E. Hornung, R. Krauss and D. A. Warburton (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, 55-93. Leiden and Boston, Brill.
- Hoffman, M. A. 1979 *Egypt before the Pharaohs: The Prehistoric Foundations of Egyptian Civilization*. New York, Alfred Knopf.
- Hoffman, M. A., C. Lupton and B. Adams 1982 Excavations at Locality 6. In M. A. Hoffman (ed.), *The Predynastic of Hierakonpolis: An Interim Report*, 38-60. Giza and Macomb IL, Faculty of Science, Cairo University Herbarium and The Department of Sociology and Anthropology, Western Illinois University.
- Holmes, D. L. and R. F. Friedman 1994 Survey and the Test Excavations in the Badari Region. *Proceedings of the Prehistoric Society* 60: 105-142.
- Kaiser, W. 1957 Zur inneren Chronologie der Naqadakultur. *Archaeologia Geographica* 6: 69-77.
- Kemp, B. J. 1987 *Ancient Egypt: Anatomy of Civilization*. London, Routledge.
- Lythgoe, A. M. and D. Dunham 1965 *The Predynastic Cemetery N7000: Naga ed-Dêr; Part IV*. Berkeley CA, University of California Press.
- Mann, G. E. 1989 On the Accuracy of Sexing of Skeletons in Archaeological Reports. *The Journal of Egyptian Archaeology* 75: 246-249.
- Midant-Reynes, B. 2000 The Naqada Period (c. 4000-3200 BC). In I. Shaw (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, 44-60. Oxford, Oxford University Press.
- Mond, R. and O. H. Myers 1937 *Cemeteries of Arment I*. London, Egypt Exploration Society.
- Parker Pearson, M. 1999 *The Archaeology of Death and Burial*. Stroud, Sutton Publishing Ltd.
- Payne, J. C. 1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*. Oxford, Clarendon Press.
- Peet, T. E. 1914 *The Cemeteries of Abydos: Part II. 1911-1912*. London, The Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. 1920 *Prehistoric Egypt: Illustrated by over 1,000 Objects in University College, London*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. and A. C. Mace 1901 *Diospolis Parva: The Cemeteries of Abadiyeh and Hu*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas*. London, Bernard Quaritch.
- Podzorski, P. V. 1990 *Their Bones Shall not Perish: An Examination of Predynastic Human Skeletal Remains from Naga-ed-Dêr in Egypt*. New Malden, SIA Publishing.
- Podzorski, P. V. 1994 *The Northern Cemetery at Ballās in Upper Egypt: A Study of the Middle and Late Predynastic Remains*. Berkeley CA, Coyote Press.
- el Sayed, A. 1979 A Prehistoric Cemetery in the Abydos Area. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 35: 249-301.
- Stevenson, A. 2009a *The Predynastic Egyptian Cemetery of el-Gerzeh: Social Identities and Mortuary Practices*. Leuven, Peeters.
- Stevenson, A. 2009b Social Relationships in Predynastic Burial. *The Journal of Egyptian Archaeology* 95: 175-192.
- Tainter, J. A. 1978 Mortuary Practices and the Study of Prehistoric Social Systems. In M. B. Schiffer (ed.), *Advances in Archaeological Method and Theory Volume 1*, 105-141. New York, Academic Press.
- Thomas, A. 2004 Some Comments on the Predynastic Cemetery at El-Mahasna. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at Its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 1041-1056. Leuven, Peeters.
- Wilkinson, T. A. H. 2000 Political Unification: Towards a Reconstruction. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 56: 377-395.
- 黒沼太一 2017 「エジプト先王朝時代、ナカダ遺跡における合葬墓—未公開資料を用いた埋葬様式分類と空間分析からの墓地利用の検討—」『西アジア考古学』18号 17-33頁。
- 馬場匡浩 2014 「エジプトの王墓—ピラミッド出現に至る墓の変遷と文化・社会の変化—」アジア考古学四学会(編)『アジアの王墓』193-215頁 高志書院。

黒沼 太一
首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程
Taichi KURONUMA
Graduate School of Humanities,
Tokyo Metropolitan University